全電源喪失の記憶

証言　福島第1原発

■第5章「命」

③

所長、残る人選指示

「第2原発へ向かえ」

3月15日午前6時14分、福島第1原発の免震重要棟に衝撃が伝わり、2号機の圧力抑制室の圧力がゼロになったと連絡が入った。抑制室が破損して気密性がなくなり、大量の放射性物質が出てくる―。誰もが震撼した。

所長の吉田昌郎(56)は対策本部中央の円卓を回り込むと、放射線管理を担う保安班員に風向きを確認した。敷地西側の正門前で線量を計測しているモニターカーからの情報では、風は北西から吹いていた。

吉田は退避先の福島第2原発（南約12キロ）が安全か確認したかったのだ。自席に戻ると、総務班長を呼んでこう言った。

「線量の低い場所を探して退避だ。なければ2F（第2原発）に向かえ。風向きは大丈夫だ」

「とりあえず正門の先でどうですか」

「それでいい」

退避の手順が決まった。総務班長は副班長小薬敏子(55)に指示した。

「バスを頼みます。みんなを乗せたら正門の先で待たせてください」

小薬は大型免許を持つ男性社員6人を連れ、協力企業から借りたバス6台が止めてある免震棟近くの道路に向かった。午前6時27分、総務班長がテレビ会議で発言した。

「皆さん、速やかに退避してください。最終目的地は2Fです。免震棟近くの路上にバスがあります。とにかく乗れるだけ乗ってください。まず正門の先で線量を測ります。とどまれなければ2Fに行きます」

総務班長はこの後、第2原発に「そちらに行くことになります」と電話を入れた。

屋外に出るには全面マスクが必要となる。保安班員が装着方法を説明し始めたが、既に対策本部の出口に向かって人の流れができていた。

午前6時33分、吉田は免震棟に誰を残すのか人選するようテレビ会議で発言した。

「必要な人間は班長が指名すること。あとは総務班の指示に従って退避するように」

ところが午前6時42分に吉田が発した言葉は、不可解なものだった。

「構内の線量の低いエリアで退避。本部で異常がないことを確認できたら戻ってきてもらう」

第2原発を退避先とすることは吉田と総務班長の間で前日夜に決まっていた。では吉田はなぜ「構内の」と言ったのか。この時の構内はどこも線量が高く、とてもとどまれる状況ではなかった。

しかし約40分前、東京電力が第1原発から全面撤退すると考えた首相の菅直人(64)が本店で「逃げ切れないぞ」と激高していた。

部下たちが「逃げた」と非難されないよう、吉田はとどまれないことを分かっていながら「構内に退避」と指示し、第2原発に行く正当性を担保したのではないか。

「吉田さんはそういう人です」。対策本部にいた多くの部下たちはそう口をそろえた。

（敬称略。年齢、肩書は当時。共同通信　高橋秀樹）

2011年3月15日に福島第1原発免震重要棟から退避した約650人が向かった福島第2原発体育館＝7月

m/コメから基準超のセシ　発　と説明を受け―の可能性を把握していたに―遺憾。農水省に対しては速